

国土交通省北海道開発局の札幌開発建設部岩見沢河川事務所が現在取り組んでいる北村遊水地事業では、遊水地内の土地所有者から、事前に遊水地として使用させていただくことのできることを得て、良好な環境の下で営農を継続できるように事業を進めています。昨年に続き、2019年3月7日、岩見沢河川事務所と当協会の環境コンメンズ研究会の共催による講演会が、岩見沢市内で開催されました。今回は小磯修二研究会座長の基調講演の後、地域との共生事例について、岩見沢市文化財保護委員会委員の村田文江氏に語っていただき、地域の方々とトークセッションを行いました。

クローズアップ①

『地域との共生を考える』

～北村遊水地事業と地域創生～ 開催報告

(一財)北海道開発協会 開発調査総合研究所

地域との共生事例講演

北村の歩みに向きあう

～地神碑：五社大明神をめぐる～

村田 文江 氏 岩見沢市文化財保護委員会委員



今日は私の大好きな地神ぢじんさんの話をいたします。

私は昭和59年から岩見沢市に住んでいますが、北村とはあまりご縁はありませんでした。「幾春別川ふるさとの川づくり懇談会」のメンバーになり、河川事務

所の案内で北村遊水地のフィールドワークをしたとき、旧豊正5自治会の五社大明神の地神碑を見つけ、北村の歴史を調べて地神碑を探し回るようになりました。

地神碑の基本形は五角形で、それぞれの面に天照大神あまてらすおおかみ、大己貴命おほむちのみこと、少彦名命すくなひこなのみこと、埴安媛命はにやすひめのみこと、倉稲魂命うかのみたまのみことの神さまの名前が刻まれています。

天照大神は伊勢神宮でよく知られている神さまで、大己貴命と少彦名命は札幌神社（北海道神宮）に祀まつられている開拓三神のうちの二神です。埴安媛命は土の守り神、倉稲魂命はお稲荷さんのことで、いずれも農業の神さまです。台座には建立年と建立者の名前が刻

まれています。また、神さまの名前がなく、五社大明神、地神社、地神宮と文字だけを刻まれた碑も多く、自然石に刻まれた碑もたくさんあります。お祭りは春秋しやにちの社日に行われます。社日とは、春分や秋分の日にもっとも近い、戊つちのちの日で、今年は3月22日と9月18日になります。春まひしの祭祀では豊作を祈るほか、その年の営農についての相談や種たねの交換などもします。秋は豊作を祝って神さまへお礼をし、翌年の農作業に向けてみんなで話し合いをします。

祭りをを行う集団は、部落会や農事実行組合、戦後は農事組合、自治会など、農作業や水利にかかわる一番小さな単位の集まりが一般的です。

地神碑は、自治会館のかたわらや神社の境内に建立されることが多く、祭りに神主さんは関与のりせず、祝詞のりとやしめ縄づくりなども自分たちで行います。会館での直会では、男性は営農や農政について、女性は家事や育児なども話題になり、世間話を通じた情報交換の場でした。ですから、地神祭は地域の人々の暮らしに根ねざす、とても重要な行事でした。

地神碑は、徳島県の信仰が北海道に広がって根ねづいたと考えられます。徳島県、淡路島南部の徳



五面に神さまの名前が刻まれている基本の地神碑

島藩領、香川県からの移住者が入植したところには、ほぼすべてに地神さんを祀った何らかの痕跡があります。特に、空知・後志・富良野・上川地方の水田地帯に濃密に分布しています。

北村では、香川県から狐森^{きつねもり}に15人、下美唄に2人、砂浜^{すなはま}に4人が移住しています。また、徳島県から美唄^{びばい}達布に1人、赤川に1人、幌達布に6人、砂浜に4人、一区に2人が入植したようです。北村農場を拓いた北村雄治は山梨県出身ですが、江戸時代後期から山梨県内にも五角柱の石碑を祀る地神信仰があったようです。

北海道に移住した人々は、自分たちの故郷の信仰や習慣を大事にしていたので、一つの村に出身地の違う人が入ると、生活文化の違いから軋轢^{あつれき}があったようです。しかし、地神さんがその違いを越えて開拓地に広まったのは、農業の守り神だったからでしょう。

また、北海道に移住した人々は最初の場所に定住するのではなく、道内移住を繰り返すことが多く、道南、道央から道北、道東へと地神信仰が広まり、戦前には樺太にも地神さんがあったそうです。

北村の地神さん

北村の地神さんは、北都、中央、豊里、豊正など石狩川河畔に分布しています。なかでも豊里では、地区ごとに地神碑があると『豊里九十年のあゆみ』は記しています。私が確認した16基（月形町雁里を含む）のうち10基が遊水地内に集中しています。

開拓の初めのころは道路がなく、海や川が道の役目を果たしていたので、移住者は海岸と河岸から入地しました。特に川の自然堤防は高く肥沃でしたから、最初の小屋掛けと開墾には適していて、そこからムラが形成されました。

北村が昭和42年に字名を改正した当時は、まだ旧役場や郵便局、北村農場事務所、寺院が石狩川河畔にあったので、「ここが北村の中央」「ここが北村の都」「ここが豊かなふる里」と名づけたのでしょう。地神碑は、ここから開拓が始まったという北村の歴史の語り部とも言えましょう。

地神碑が建てられた時期にも意味があります。最も古い「旧中央第2自治会」の碑は、北村に二級町村制が施行された大正8年に建立され、建立者には北村農場の小作に入った人たちの名前が見られます。『北村村史』によると、碑に刻まれた瀬尾幸太郎さんは、この年にホルスタイン種を導入しています。北村農場で新たな一歩を踏み出す意志が、建立に込められていると思います。

建立年で多いのは、大正15年、昭和4、5、7、12年で、その時期に建立された背景には、造田運動があります。“北海道で米をつくる”という移住者の悲願が具体化する時期です。昭和4年に北海かんがい溝ができて北村まで用水が達し、農事実行組合が結成されています。また、昭和6年には北村^{びん}龍さんが北村農場を解放して“自作農の創設”に取り組みます。それを契機に、他の農場にも同様の動きが広がっていきます。この2つの出来事が北村における地神碑の建立に大きく関わっていると思います。

昭和20年代に建立された地神さんには、敗戦後、どのように新しい時代の農業を切り拓いていくかという思いが込められています。また、昭和40年代になると、本格的な基盤整備事業で泥炭地を改良し、水田経営の近代化に立ち向かうという決意が建立を促したのでしょう。

地神碑は、私たちにいろいろなことを語りかけてきます。地域の歩みを記録し、昔のことをお互いに語り合うことによって記憶を再生して、自分たちがいま何をすべきかを語る場となっています。特に、北村の地



旧豊里5自治会 春の地神祭

神さんは、地神碑を建立することが自作農としての気持ちを持たせて、次代の農業を語りあう場であったと思います。また、住民の共同一致を具現して精神的に結集する場が、春と秋の社日だったのでしょう。

遊水地事業で地神碑を撤去することになって、すでに作業が進んでいます。印象的だったのは、河川事務所の皆さんが碑をお祀りしている方々と一緒になって、時間をかけて丁寧に対応されていることです。事業による撤去は仕方のないことだと思いますが、地神さんは、「開拓は河畔から始まる」という開拓時代の追体験ができる場、そこでその土地の空気を感じながら「歴史的・文化的な価値に気づく場」です。私は勝手に「フィールドミュージアム」と命名しています。子どもたちと地域の歴史を学ぶツアーができるようになるといいな、と思っています。

北村の魅力を語るトークセッション

- 進行：環境コモンズ研究会座長 小磯 修二
 ・岩見沢市文化財保護委員会委員 村田 文江氏
 ・NPO法人山のない北村の輝き理事長 石黒 武美氏
 ・北の大地マルシェ代表 小西 泰子氏
 ・北村の20年後を考える会代表 北村 慶如氏
 ・岩見沢河川事務所調査課長 稲澤 豊



小磯 村田先生のお話を聞いて、北村にこんな魅力があったのかとあらためて驚かされました。最初に、皆さんから活動内容を含めて自己紹介をお願いします。

石黒 平成13年から活動している「山のない北村の輝き」理事長の石黒です。当時は市町村合併という大きな問題を抱えて“北村”の名前を残す意味で、多くの仲間に支えられながらNPOを立ち上げて活動してきました。これまで、雪中植林や高校の修学生を家に泊める農泊を先駆けてやってきました。時期尚早と思っ

たこともありましたが、私たちのNPOは環境に即した体験型の活動をしています。

私は昭和36、50、56年の水害を体験していて、水が入ってきたときの恐ろしさは忘れられません。近年は大きな災害はありませんが、常に心配しています。

小西 月形町と美唄市に接する豊正地区で農産物直売所「北の大地マルシェ」を活動の拠点に、野菜の直売や加工、カフェ運営などを通じて、消費者と交流をしています。平成27年までは自宅前で(株)小西ファームとして農産物直売をしていました。しかし、地域の過疎化が進み、将来のことを考えていたとき、JAいわみざわの大富支所が空き店舗となることから、過疎化対策と地域づくりのために住民の強い希望で北の大地マルシェを開設することになりました。

北村 「北村の20年後を考える会」の会長で、遊水地の中で営農している北村です。この会は、遊水地事業を通じて、北村の将来の発展に向けて学んでいこうと、北村の若手営農者19名で設立しました。現在、遊水地事業に関することは親の世代が対応していますが、遊水地が完成した後で問題が発生すれば自分たちの世代が対応しなければいけません。そこで、河川事務所の皆さんと直に接することができるように、若手の会を発足し、今は遊水地について勉強しているところです。



北村の将来を想定し、昨年は自腹で旅費を負担して、小磯先生と一緒に東北の「一ノ関遊水地」を視察しました。今年は、三重県の「上野遊水地」を視察することになっています。

稲澤 岩見沢河川事務所の稲澤です。北村遊水地に関する地元との調整など、事業全般に関わっています。平成26、27年と岩見沢河川事務所河川事業専門官、翌年に河川防災専門官を務め、異動で1年間小樽開発

建設部に勤務したのち、昨年4月に戻ってきました。今日ご登壇されている皆さんと一緒に話し合いながら事業を進めています。

小磯 ここからは「北村の魅力語る」をテーマに、遊水地事業を含めた今後の北村の魅力づくりについて具体的な提案をいただきたいと思います。

先ほど村田先生からは、北村の地神さんに込められた想いと、それを確認できる資源として、地域の魅力につなげていくという提案をいただきました。改めて北村の魅力に向けて、一言お願いします。

村田 北村のことを調べていて驚いたのは、それぞれの節目で自治体史を刊行していることです。役場や住民の人たちが、地域の中で起きた辛いことをどう克服して今を生きているのかを伝えたい、という思いだと受け取りました。

北村では河川改修、かんがい、^{ほじょう}圃場整備と多くの公共投資がされています。そのことによって暮らしがどうなったかを記録として残し、自治体のあり方などを次の世代に読み取ってもらいたい、ということなのだと思います。

かつて北村農場には、若い人たちの夜間の学びの場がありました。戦後は学校の先生が地域に根づいて村の記録をまとめるなど、人材に恵まれていたこともあります。それらが合併によって見えなくなってしまうことは残念なので、展示などで何らかの形で発信していくことを考えています。



左から村田さん、石黒さん、小西さん

小磯 自治体の歴史が残されていることは、地域の財産です。自治体史づくりにきちんと地域が向き合ってきたことも北村の魅力だと思います。

石黒 私は北村で生まれ育った人間です。NPO活動を通じて、外から来た方が北村の魅力やすばらしさを理解して、それを私たちが教えてもらっていると感じています。

平成22年7月7日に北村遊水地に対する北村の住民合意が得られていますが、この遊水地事業がこれからの地域農業を担う若者にプラスになるのか、地神碑に刻まれた先輩諸氏に評価されるのか、いまだに心配しています。

北村は松浦武四郎が上陸したところで、石川啄木の歌碑もあります。水害常襲地帯という負のイメージが強い地域ですが、歴史的に評価すると誇りの持てる地域だと思っています。

小西 豊正地区の農家は35戸ほどで、農業の将来につながる学習組織として「豊正FAM協議会」を立ち上げています。この会は生産技術の向上、農業経営の改善、地域の活性化に向けた活動を推進しています。また、協議会の組織である「ふれあい室」では直売や加工、カフェ事業のほか、生産者の仲間とともに地域資源を生かしたフットパスや「落花生まつり」などのイベント交流活動を行っています。“見て・触れて・会話して”をテーマに、食物を介して幸せを感じてもらい、農業への理解を深めてもらうために活動しています。

私たちの地域は合併によって学校、役場、農協などが移転し、遊水地計画で市街地に移転する世帯が増え、過疎化が進む人通りの少ない地域です。そこで、農産物直売所「北の大地マルシェ」を地域の交流拠点として、農業の力を最大限に活かし、住みよい地域づくりをしたいと考えています。今後“人のつながり”が豊正地域の魅力となれば、地域づくりに貢献できるマルシェになると思っています。

小磯 「豊正」という地名が素敵ですね。皆さんが豊正という地域に誇りを持って活動されている様子が伝

わってきました。

北村 近所の農家の人たちが登校のときに話しかけてくれたり、見守ってくれたりした、そんな当たり前の日常や地域の温かさが、私の小さなころの思い出です。ところが、遊水地事業で地域の人たちがバラバラになり、自分が持っていたアイデンティティがなくなりました。しかし、クヨクヨしていても仕方ありません。これから新しい魅力を環境コモンズ研究会や岩見沢河川事務所、そして周りのみんなと一緒に考えて、新しい地域の魅力を再生できるチャンスにしたいと思います。

小磯 遊水地事業が進行しているため、どうしても残すことができない地域の資源もあるでしょう。変化がある中でどうすれば新しい魅力を創出できるかは、地域の人たちが受け身でいるだけでなく、自分たちで何かを創り出すエネルギーが必要です。ある意味、この場もその役割を担っていると思います。



稲澤 この地域は、明治28年に開拓で入植された方の後継者という熱い思いを持っている人が多いと思います。現場で地域の皆さんと話していると、農業の魅力や地域の将来を考えていらっしゃるものがひしひしと伝わってきます。そのような人がいることが、北村の魅力ではないかと思います。

以前、地元の方とお話をしていると、河川事務所の皆さんは農業を知らないと言われました。そこで、事務所の職員が少しでも農業を理解しようと、事務所の敷地にミニ田んぼを作りました。実際に育ててみると毎日、稲のことが気になるようになり、育て方の難しさも知ることができました。今年で4年目になります。皆さんに助けをいただきながらこれからも稲や野菜を育てていきたいと思っています。

小磯 河川事務所の皆さんのこの取り組みについて、皆さんはどのように思われていますか。

石黒 遊水地事業が始まった当時は、国のお役人さんなので地域に密着した活動はしてくれないだろうと思っていました。しかし、職員の皆さんが前向きに地域に溶け込もうとしてくれているので、大変ありがたく思っています。

小磯 石黒さんの活動のきっかけは、市町村合併ということでした。北村が合併という厳しい選択をしたことが、しっかり地域のアイデンティティを維持して、次の世代につなげていくエネルギーにつながっているのだと、改めて感じました。

環境コモンズ研究会が考えているコモンズのコンセプトは、地域が持っているポテンシャルを活かした魅力づくりをみんなで実践していくことです。村田先生の地神さんの魅力を活かしたフィールドミュージアムのご提言、豊正での小西さんの活動など、今日お聞きしたアイデアや提案はすべてコモンズに通じるものがあると思います。

最後に、私が感じる北村の魅力ですが、節目に自治体史を出されていることは素晴らしい取り組みです。その背景には自然災害を克服してきた苦難の歴史があります。歴史を後世に伝えていくことは、国や自治体が幾多の災害にしっかり向き合ってきたことへの恩返しであり、次の世代への期待と見ることもできます。その営みは北村の財産です。北村のそのこだわりを今後の地域の魅力づくりにつなげていただきたいと思います。



北村の魅力を語ったトークセッション